

57 精神外科の隆盛と衰微

藤倉 一郎

一九三五年、ポルトガル、リスボン大学教授E・モニスによって両側前頭葉白質切載術が初めておこなわれた。彼は「正常な精神生活は、シナプスの良好な機能に依存し、精神傷害はシナプスの混乱の結果として表れる。患者の苦悩や病的思考は前頭葉内の神経細胞間に異常なシナプスの結合繊維群を生じるためにおこるものであり、この回路と白質を破壊することにより、結合を切断し病的な精神症状を除去することが出来る。」と考え、二〇例に応用し報告した。この内、三五パーセントは寛解、三五パーセントは軽快、三〇パーセントは無効であった。

つづいてワシントン大学のフリーマンが追試報告して世界各国にブームを引き起こした。一九四八年にはモニスが会

長で、第一回国際神経外科学会が開催された。そして翌一九四九年にはモニスはノーベル賞を受賞したのである。日本では、新潟大学の中田教授により、一九三九年に前頭葉切除手術が行われた。

そして学会においても、一九四八年頃よりロボトミーに関する多くの演題が現れはじめた。シンポジウムまで行われて、隆盛をきわめた。

一九七二年から米国では、精神外科に反対する動きがみられ、やがて日本でも同じ様な現象があらわれた。そして向精神経薬の急速な発展とともに精神外科は衰微の一途をたどった。しかし米国では、一九七七年「精神外科に関する委員会報告と勧告」が公表され、過去十年間の治療成績を検討し、手術でよくなったものが、七八パーセントもあり精神外科療法は有効であると結論が出されているとの報告もある。日本においては、今日、精神外科はまったく行われることなく、また世界的にも行われることは殆どないと思われる、まさに過去の歴史的な治療法にすぎないと考えられているのが実情である。

医学史のなかで、このようなノーベル賞を獲得するほど

の脚光をあびた外科治療が、華やかに医学界に登場し、ほんの僅かな間もてはやされながら、まもなく消えていったということは、何を意味するのであろうか？

今日における臓器移植の問題とてらし合わせて考察したい。

(医療法人一期会藤倉病院)

58

中国口腔医学史考の簡介

抄録原稿末着

周大成